日本医史学雑誌　第四十七巻 第二号　目　次

原　著

徐霊胎と吉益東洞――その学術思想における異同点およびその原因の研究 ……黄　煌……三二九
清医胡兆新の来日記録と業績（二）――長崎における一八〇三～一八〇五年の活動 ……郭　秀梅……二六一
モーゼス・マイモニデスの医学的著作概観……泉　彪之助……二八三
『解体新書』のオランダ人翻訳者ディクテンについての研究 ……石田　純郎……三〇九
Medicine and New Knowledge in Medieval Japan: Kajiwara Shozen (1266-1337) and the Man'anpo (2) ……Andrew Edmund GOBLE……四五二

研究ノート

『医心方』房内篇についての考察 ……嚴　善炤……三三七
GHQ看護課の占領直後から約六ヶ月間の活動……城丸　瑞恵……三五一
明治初期の陸軍軍医学校の卒業生……黒澤　嘉幸……三六七

資　料

癸亥　春林軒続薬方册（一）……高橋　均、坂田　育弘、児玉　重隆……三八二
吉益家門人録（二）……町　泉寿郎……三九四

記　事

例会記録 ……四一一
例会抄録
医方卷石秘録に見られる洋式外用薬について ……中西　淳朗……四二三
吉益脩夫――断種法をめぐる人びと（その四）……岡田　靖雄……四三三
小川鼎三先生生誕　一〇〇年記念特別例会 ……四五五

紹　介
石渡隆司『医学哲学はなぜ必要なのか』……月澤美代子……四三
小松良夫『結核――日本近代史の裏側』……兼松　一郎……四四
岡田靖雄『歴史から見た日本の精神科医療の問題点』……小池　清廉……四五
米本昌平　他『優生学と人間社会　生命科学の世紀はどこへ向かうのか』……瀧澤　利行……四六
文庫めぐり
名古屋市蓬左文庫……山内　一信……三五〇
鹿山文庫……深瀬　泰旦……三六六

《本号の表紙絵》

因証弁・古方後世両医論の扉絵

画面右端、百味箪笥を背にした禿頭・十徳姿の人物が本書の作者、高村隆円（幕末江戸の医者、伝未詳、草芽庵と号す）。「イヤ私の因証弁は決して穿（うが）ちの積りではござりません。どこ迄もまじめにかいたのでござりますが、とかく見る人がしゃれのこころえで見られますには、実にこまり入ます」と二人の武士と会話中。

書題は医書のごとくであるが、実は古方・後世の異同優劣論に形式・用語を借りた、戯作体の国防論である。この六月に米海軍提督ペリーが通商を求めて浦賀に来航した、嘉永六年（1853）九月の作。『因証弁』は古方派の峻剤投与（異国船打払い）では根治しないから、当分は疑似の症（来航の真意）に注視しつつ後世流の補益（通商と海防）につとめ硬軟両様に備えるべきことを説く。『古方後世両医論』は安逸に身を持ち崩し天行病交疫（交易にかける）に罹った皇国神洲郎（みくにしんじゅうろう）の治療にことよせて、弥縫策に日を送り開国論議に明確な方針をうち出せない幕政を批判している。

所掲の本は故大塚敬節収集の修琴堂文庫（北里東医研医史研寄託）の所蔵。未刊のまま写本で伝わり、他に慶応富士川文庫に一本、武田杏雨書屋に二本が伝存する。修琴堂本の見返に「此書ハ平亭銀鶏自筆也」と書入があり、杏雨書屋移管以前の『乾々斎架蔵和書目録』でも著者を平亭主人としていて、畑銀鶏（1790〜1870、上野七日市藩医、金鶏の男、戯作者）と本書のかかわりを示唆するが未詳。

（町　泉寿郎）